

(2) 跳び箱運動の特性と一貫性の構造

跳び箱運動の特性は、人工的に作られた物的障害（跳び箱）へ挑戦し、それを克服して、できなかったことができるようになる、あまり上手でなかったのが、上手にできるようになった、など、一人一人が自分の能力にあった課題に取り組み、それがどの程度できるようになったかを楽しむ運動としてとらえる。また、個人的スポーツとしての特徴があり、それに即した運動が、小・中・高等学校一貫性に基づいて精選されたことにより、運動の技能内容の構造や関連を系統的にまとめることが容易になったといえる。跳び箱運動の技能の内容は、小学校・中学校の指導書、高等学校の解説書に例示されている跳び箱運動にかかわる技能内容を拾い出し、系統図にまとめたのが表2である。これをみると、児童生徒の能力、興味、意欲の適切な経験を通して、易から難へと新しいわざや高さへの挑戦などの目標や欲求をよび起こすように、内容が発展的、系統的に精選されていることがわかる。すなわち、小学校の第3学年までは、運動の組み合わせによる総合的な取扱いを工夫することに重点を置き、第4学年からは、前述のように「器械運動」として独立する。内容は、腕立て開脚跳び、腕立て閉脚跳びを中心に、自己の能力に適した課題に挑戦できるように配列されている。中学校では、技能の優劣よりも個人の能力に応じた課題を解決していく過程での喜びや楽しさを体験させるように、跳び方の工夫に重点が置かれている。高等学校では、中学校に加えて、自己の能力を最高度に発揮させるための強い意志力と体力を身につけさせようとした内容になっている。しかし、これは、あくまでも指導の参考として例示されているもので、それぞれの学校や教師は、児童生徒の実態に応じて、創意工夫により指導計画を立て、実際の指導が行われなければならない。

態度については、克服的スポーツの特性から、危険が伴いやすいので、安全面

の配慮が必要であること、すなわち、器具の使用の仕方などを工夫し、安全にしかも合理的に運動できることや、自己の能力に適した課題を設定して挑戦することが、小・中・高等学校一貫して示されている。また、自分の課題に向かって根気よく努力することや、グループで役割分担をし、互いに教え合ったり励まし合ったりする協力の仕方も大切なこととしている。

表2 跳び箱運動における技能内容の系統図

